

昭  
和  
二  
十  
四  
年  
七  
月  
二  
十  
三  
日  
發  
行  
三  
種  
郵  
便  
物  
認  
可  
（  
每  
月  
一  
回  
・  
十  
五  
日  
發  
行  
）

（  
通  
第  
二  
九  
二  
号  
）

# 慈 光

第  
二  
十  
五  
卷

第  
九  
号

## 次

内	愚	外	賢	近角常観	(1)					
法	味	滴	々	池山栄吉	(5)					
病	床	談	片	菅瀬芳英	(8)					
師	を	求	め	る	心	(5)				
				信国	淳	(10)				
念	仏	詩	抄	木村無相	(16)					
生	き	る	こ	と	死	ぬ	こ	と	花田正夫	(19)

# 内 愚 外 賢

「たとい牛盗人といわるとも、もしは善人もしは後世者もしは仏法者とみゆるように振舞うべからず」

乙卯七牛

乙卯の歳、聖人八十三歳、御満悦のあまり、安静の御寿影を画かしめられしとき、一方には愚禿鈔を書きて、その御自督を傾けられた。実に愚禿鈔は聖人がその中心の自由にてまします。その思召しは題号の下の御悲歎にてうかがうことができる。

「賢者の信を聞きて、愚禿の心を頭わす。賢者の信は、内は賢にして外は愚なり。愚禿の心は内は愚にして外は賢なり」

とあるが、即ち御自督の御悲歎である。

特に深くいただき奉ることは、内愚にして外賢なりと云い放たれたままであるところが実に深く感ずることである。唯信鈔文意において、内に虚仮を懐く、を釈したまう文にこの世のひとは無実のころのみにして、浄土をねがうひ

## 近 角 常 観

とは、いつわりへつらいのころのみなりときこえたり、世をすつるも名のころ、利のころをさきとするゆえなり、しかれば、善人にもあらず、賢人にもあらず、精進のころもなし、懈怠のころのみにして、うちはかなしくいつわりへつらうころのみつねにして、まことのころなき身とするべし、と云い放ちたままである。

かく云い放ちたるままにして、さらに善くすることの出来ぬが我等の有様である。しかして善くせんと試みんとする心が起らぬのである。全くあやまりはつるより仕方がない、しかしなんとかせねばならぬという心はない。なぜならば、どこどこまでも見抜いて下されてお見捨てない御慈悲である。さればとて一点これよいというような心持はない、お悲歎の文に、恥ずべし、傷むべし、と仰せらるるのがこれである。

恥ずべし、傷むべしというは、我等が煩惱を見捨てたまわぬお慈悲にとかさされて、煩惱の水解けて功德の水となる

心持である。悪くはならぬと堅く結びて益々凍るのではない。氷より暖を出さんとりきむのではない、氷のままでも飽くまで透りて下さる日光の力にて、自然に強剛難化の氷もとけて恥ずべし傷むべしと融けてくるのが、よくもよくも我は内は愚にして外は賢なりという御悲歎である。やもすれば恥ずべし傷むべしというは、これではならぬと固くなることの様にも思われる、現に御一代聞書には蓮如上人の御弟子が、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の證に近づくことを快(たの)しまずとあるを読んで、往生すべきか、すまじきかと互に語り合うのを物越しにきこしめされて、蓮如上人立出でて申されるには、されば愛欲も名利も煩惱なり、されば機のあつかいをするは雑修なりと仰せられ候とある。往生すべきか、すまじきかというが即ち雑修である。仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、喜ぶべきことを喜ばず、いそぎ浄土へまいりたき心のなき煩惱具足の凡夫を特に憐みたまうのである。して見ればすこしも機のあつかいなくして、恥ずべし傷むべしと慚愧懺悔の外はない。

浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし、虚仮不実のわが身にて、清浄の心もさらになし、とあるが、実に

この内愚外賢と打出したるお懺悔である。しかるに入信前には浄土真宗は帰したとあるに、清浄の心もさらになしでは矛盾じやないかと思ふことがあった。しかるにいただいて見れば、我等が不真実、不清浄であるを見捨てたまわぬが如来の清浄真実にてまします。如来は火なり、我等は炭なり、炭の心底までお慈悲の火が透りて下さるのである、されど私共自身は徹頭徹尾炭である、火が炭の心底まで透るところで火が燃える、お慈悲の火は我等が不実の心を憐みたまうなれば御真実をただけいただくほど我身の不実を懺悔するの外はない。

気心を知りたる友人の前には何事も打明けて語り合いて慚愧する如く、如来の前には心の底まで打明けて懺悔するが悲歎の御文の、誠に知りぬ悲哉愚禿、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快まず、恥ずべし、傷むべし、と心を傾けての御自白である。歎異鈔第九章も同じ思召であり、悲歎述懐和讃も同意である。

よしあしの文字をもしらぬ人はみな

まことのころなりけるを

善悪の字しりがおは、おおそらごのかたちなり

是非しらず邪正もわかぬこの身にて

小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり

この言い放たれたお懺悔がありがたい、名利に人師をこのむなりと懺悔された、実に何ともいえない痛酷なお懺悔である。我等は実に名利の奴である、愛欲の塊りである。

とかく蓮如上人のお弟子が往生すべきか、すまじきかと案ぜられたがごとく、とかく名利でもよいか、名利は悪いとかになりやすいのである。名利でよいならば恥すべし、傷むべしでもあるまい。又、信巻に引きたまいし涅槃經の御文に、名利の為にせず、利養の為にせず、勝他の為にせず、とあるべきでない。又聖人が法然上人の御前にて、人師戒師停止すべきよし誓言発願おわりき、とあるを見れば実に事実の上に於ては、たしかに名利をすてたまえることに内に賢外愚にまします。

かく言えば直ちにそれでは名利で悪いか、名利は止めねばならぬかとなりやすいのである。勿論止められるものなら止めるもよからうが、石は落ちぬ様にしようとするけれども落ちぬ訳にはゆかぬ、浮かぼうとすれば浮かぶことは出来ぬ。その落ちることを憐れみたまう如来の願力自然の御力なればこそ、重き石が軽々と打上げられるのである。さればちつとも機のあつかいはいらぬのである、否、機のあつかいをするのは石自身が上らうとし、炭自身が火を出さんと欲し、氷自らが融けんと欲する様なものである。その上らぬものを引上げるが願力である、その炭を火にするが慈

は後世者、善人、仏法者と標榜するほどの価値あるものではない、とのお自督より来りたのである、勿論当時、随分黒衣、裳無し衣を着し、高声に念仏して、仏法者めかした連中が諸国に横行したということが、歴史上にも見えるところを見れば、その弊もありたるなれど、本来我等が左程価値あるものではない。むしろ人より牛盗人と呼ばるとも我等に適したる名前と申すべきである。

聖人が愚禿と名のりたまいたのが全くこれである。卑謙であるというてことさらに卑下したまいしことと思うならば、大なるあやまりである。御本書に仰せらるる如く、非僧非俗なりとて中心より破戒無慚の愚禿なりとのご自督の自然の表現である。

聖人が我はこれ教信沙弥の定(じょう)なりと仰せられたは、この非僧非俗の意味である。教信沙弥と云えば直に貧賤生活とか労働者とかいう他の意味をまじえ来りて、かえって遁世、隠者、微賤ということと思うならばあやまりである。教信沙弥というも聖徳太子の化儀も同様である。

これでこそかえって遁世でない。聖人の隠遁は山より市へ出られたる隠遁である。聖徳太子が、世間虚仮、唯仏是真と遺言されたが如く、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、みなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますとの思召しである。さ

悲の火である、氷の心まで飽くまで透るが如来の光明である、恥すべし、傷むべしと心底まで融けてしまふより外はない。

かく融かしていたたくものの忽ち寒風に吹かれて本来の氷の性をあらわして又凍らんとし、炭火は火箸をもってつまみ出せば忽ちにして見る見る炭にならんとするのである我等はお慈悲を喜んだ跡から直ちにその炭の本性をあらわし、氷の本性をあらわすのである。我等は外に一応喜びがあらわれても本来が冷かなる凡愚なれば、とかく虚仮不実の本性をあらわし来るのである。この点では、内愚外賢と仰せられたが実に我等の真相である。噫！内愚外賢は我等の写真である、噫！愚なる我等なる哉。聖人はこの御自督を傾けたまいたのが実に内愚外賢の御自白である。

「外に賢善精進の相を現するを得ざれ、内に虚仮を懷けばなり」これ聖人の真面目である、浄土真宗の安心、および化儀(ごぎ)この一語に尽きたりといたたくべきである。世の中の厩のころをすてよかし、女牛の角はさもあらばあれ、ああ我等は徹頭徹尾罪惡の塊りである。

たとい牛盗人といわるとも、もしは善人、もしは後世者もしは仏法者と見ゆるように振舞うべからずと聖人の仰せられたも、つまりこの内愚外賢のお慚愧よりあらわれたるお思召しである。人より牛盗人と呼ばるとままよ、もし

れば死後も、それがし閉眼せば加茂河にいられて魚にあたりべし、と仰せられたのである、あたかも教信沙弥が遺言して遺骸を鳥獸に与えたのと同じである。

最後に聖徳太子の乙卯から、親鸞聖人の乙卯まで六百六十年、親鸞聖人の乙卯より本年(大正四年)まで六百六十年であるを思うて、うたた両聖人を追慕し奉ること切なる次第である。

「求道」第十二卷第一号より転載

### 安心小話

禿義峯

一蓮院師いわく。

もうちつと気掛りなと思うは、まだ弥陀をたのまぬなり落ちつかれぬ／＼と云うはもとより弥陀をたのまぬなり。落ちついたと喜ぶも弥陀をたのまぬなり。落ちつかれぬから落ちつこうとばかりこむも弥陀をたのまぬなり。落ちついたか落ちつかれぬかと試して見るも弥陀をたのまぬなり。これらは我心をながめてたのまんとして居る、方角を取りちがえて居る。かえすがえす我心をながめず弥陀をたのむべし。

弥陀をたのむというは、本願の月に真向になりて我心をながめぬことなり

聖人の常の仰せ

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」

と、よきひとの仰せをこうむりて信じられた刹那、聖人の心肝に滲み出た文字

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」

とあるが、聖人の常の仰せである。

これは聖人の獲信の原体験であり、同時にまた、其後につづくもろの体験の下地（したじ）である。だから聖人のどの御述懐でもよい。たとえば歎異抄にあるお言葉の一つに見入ってみるがよい。きつとその底から、この文字が滲み出てくる。啄木の歌に

灯影（ほかげ）なき室にわれあり

父と母、壁の中より杖つき出て出つとあるように。

昭和八年九月、信道会館発行、奉行録より

俱会一処

「今生夢のうちの契（ちぎり）をしるべとして、来生悟（さと）りの前の縁（えにし）を結ばんとなり。われおくれなば、人にみちびかれ、われさきたたば、人をみちびきて、世々に知識となり、生々に善友となりて、ながく迷執を絶たむ」

（唯信鈔末文）

亡き妻が不治の病にかかつて、それとされたとき、悲歎の中から、うれしさの身にあまるを覚えたのは、唯信鈔の結びのこの文であつた。

樂しきはじめ憶（おも）うごと、哀（かな）しきおわり堪えがたし。

夜、食後、一家こそつて、仏前に歎異鈔を拝読。

「親鸞一人がためなりけり」

をしみじみ語り合つた。

昭和十一年一月一日。（於京都）

病患の一年を送つて、更生の第一年を迎える。死線を越えて何をかち得たか？曰く「ただ念仏」

○ どのつまりは「ただ念仏」。だからいの一歩も「ただ念仏」

○ 未通りたる大慈悲を自己にかけたら「ただ念仏」。さればこそいの一歩だ。いの一歩とは何より大事ということ。

○ 昭和十一年一月八日

○ 「ただ念仏」に暮れ、ただ念仏に明けたのがこの一年であつた。この意味を句か歌にすれば年頭の感ということになるのだが、一寸まとまらない。

信仰日記断片

大正十三年二月十七日（於岡山）

私の関係した、若しくは関係し得べき問題に、最広義の社会問題と、信仰問題とがある。狭義の社会問題には二十年前に手を着けて実行の段に至らなかつたが、今日盛に発展しつつある。

信仰問題では自身十年前にふれて今日までつづいていゝ。いまさら私が社会問題でもあるまいし、今後私が貢献することの出来るのは信仰問題の方だろう。十年後に信仰問題が今日の社会問題のようにさかんになるうとは思わないうが、社会問題が十分に発達しても、それにつけても信仰問題がさかんにならなくてはならないはずだ。

つまり社会問題は信仰問題に基礎づけられなくてはならぬ。両問題の關係は裏と表のようなものである。そう考えている人はすくない、自証している人はなおさらすくない

大正十五年一月二日。（於住吉）

岡山の三奇人を迎えた。

和歌と俳句

たのまるるただ念仏のわれにありさるべき業はさもあらばあれ

惨怛たる悔いの残せし一一のあとかたもなき無碍の一道  
夏されば機若葉のなよやかさ久遠女性のひらめきをみる  
わが庭の萩さかりなりここかしこ白き孔雀のむれるるがこ  
と

木枯の音も時雨とまがひけり森の木の葉を雨とふらして

人ならば八十路の坂もこえぬらし梢まばらに残るもみち葉

来し方の十年の冬をしのぶかなまた人生の春をむかへて

ものを思へばやる瀬なきまま思ふこと思はじとこそ思ひな  
せしか

逢うてまた別るる日なり今日よりはまたの逢ふ日のめぐり  
そめける

よき人の仰せにききてみ名を呼べば喚ばはせたまふみ声き

## 病床談片

(註) 大正三年(四十三歳) 上皮癌に罹る。五年十二月に東大  
病院に入院、手術を受け、六年四月同和学園にて往生の素懷を  
遂げらる。その病中の談片であります

入院して病人と共同生活をしていれば、真の平等の大悲  
も思わせられて有難いことである。一人が一室を専用して  
がんばっている声聞地の自己満足よりは、病友と共に苦し  
みもし、喜びもするのがある。真の菩薩の行という  
ものもこのようであるかとも思われる。和光同塵(わこ  
うどうじん)は結縁のはじめ、八相成道は利物(りもつ)  
のおわりとある妙味を幾分たりとも味わわせていただくこ  
とは真に大きな獲物である。

○ 壮健な人も死ぬ。常陸山も死ぬ、大山公も死ぬ。この世  
の人はしめて皆死ぬ。けれども本願に乗托した者は前念命  
終、後念即生、即得不退と毎日生き生きして大々的往生、

こえぬ 味 煙 霧

われならぬきよらのわれのわれにありて穢悪のわれをわれ  
にしらしむ

地獄篇よみおはりぬれば除夜の鐘鳴りひびくなり何のきざ  
しぞ

○ 歳旦にまつおとつれし念仏かな

念仏をあるじとせばや三ヶ日

白道に手をつなぎたる三日かな

たまさかに如来に面す春の風

あふむけに仔犬ねころぶ日向かな

白道のかなたに続く紅葉かな

ここはまたどうしたことであたたかき

## 菅 瀬 芳 英

真に永遠の生命を得るのである。

生・老・病・死は仮相(けそう)であって、真実相に非  
ず。世間虚仮、唯仏是真とは天寿国まんだらにされるされた  
聖徳太子の常持語である。

「行って見ても行って見ても旅なれば、一寸こころで死  
んで見ようか」とやった人もあるが、そのように死を急ぐ  
にも及ばない。縁が失せれば死を現し、縁あればもうすこ  
し業(ごう)をさらすもよかるうな……

○ 乗彼願力、定得往生と思えど、前世の業報の尽きぬ中は  
思うようにゆかず。

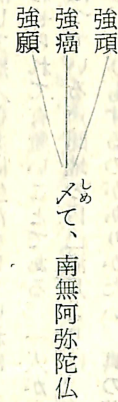
御文章に、「死期を急がんもおろかにまどいぬるかとも  
おもいはんべり……」とある。なるべく養生し、御報謝を  
完うせねばならぬ。今生に一日一夜する行は、彼の無量寿  
国にて百歳するに過ぐ、とあるから。

強頭の坊主も癌で願往生、我が身ながらも芽出度かりけり。

歳々の春より嬉し今日の春。

待ちたまう弥陀の浄土に今日もまた。  
我が春は暮の晦(みそか)のその日まで。

我が室の春は常住不変なり。  
初夢は罹什(らじゆう)の世話になりけり。



寒の入りが六日、此頃から祖師の御病がつつたらしい十六日御往生：正月を迎えるよりは御正忌の近づくのが自分にとつて重大事件：世間なみの正月とはちがって、精神的に一年中の罪惡を懺悔して新しい生活に入るのは御正忌である。二度正月があるのじや。

病氣になりてより、わざわざ見舞に来てくれるやら、各地から親切な手紙をいただくやらするのでありがたく思うているが、自分は病苦にせまられて生・老・病・死のことがしみじみと感ぜられ、平生業成なればすでに大悲光益の

### 師を求める

#### 浄土一魂の故郷

それで、浄土とはどういう処かということですが、それは仏による一切衆生の生命共同体の自覚の世界であると、一応そうも云えるのでないかと思う。阿弥陀経に俱会一処(ぐえいつしよ)という言葉がある。俱に一処に、一つの場所に会するという。俱に、というからは、私とあなたという風に、二つの者がそこにあるわけでしょう。つまり二つ分れているものが、二つのままでしかも一つの場で出会うという、そういう出合いの場所が仏の浄土である。

我々ならね、二つに分れているものなら、どんな場所でも、二つの場所に立っているということになって、一つの場所に立てないのです。我々人間的出合いでは、だから出合いが出会いとならぬのです。互いに愛しますと云って見ても、一つの場所ですべてではないんだ。誰も皆めいめい自分の処に立って、その場所を離れない、場所が一つでないのです。

身とならせてもらっておるから油断なく称名を相続しておる次第である。

それにつけても皆さんが油断どもにはなきかと、それのみ案じられてならぬ。そういうわけで御見舞のお礼のつもりで、口でも、手紙でも、御文章や、御一代聞書で蓮如上人が、みなみなの油断をおいしましめ下さったお言葉をのべて、ごちらからも健康なる御人(ごじん) いかかと御見舞申し上げているのである。

病氣は過去の業因である。救済は仏の本願である。業因のあらわれと、如来のお慈悲とが、はっきり区別が立っていいよお慈悲がありがたい。

病氣にかかるということは確かに不徳のことである。自分が病氣のために幾百人の人々に御心配をかけることは誠に勿体ないことで、わずらうということは確かに不徳なり

私が癌になって入院して以来、氣の毒じやと云って毎日沢山の人が見舞って下さるが、実は私よりも氣の毒な方が沢山ある。不治の病になった私が死ぬのはあたりまえだが、病人ばかりが死ぬと思っていると大間違いである。私はそういう人が氣の毒でならない。後生の一大事は油断から仕損ずると蓮師も仰せられている。油断大敵じや南無阿弥陀仏

### 心

#### 信国淳

だから、その一という一、処に会するという、その一といわれる場所を見つけることが大事です。それを見つけることによつて、あらゆる二がそこで一つに溶け合える。そんな一つの場所、言葉を換えれば絶対と云っていいでしょうね。絶対という処においてのみ、相對の二のままが不二である。二に分かれているままが本来の一つに溶け合えるということですよ。それを俱会一処というのでしよう。

そういう俱会一処の場所を仏の浄土という。その浄土はね、浄土の行、一莊嚴浄土の行というものによつて建立される。土を浄めるといふ菩薩の行です。そういう浄土の行というものなしに、浄土が我々の上にあらわれるということはない。浄土は仏様がつくったんだからと、仏様に任せきりでは問題にならん。我々自身が浄土の行を行ずること、それを行じる我々の上に初めて浄土があらわれるのでしよう。

土というのは、私達の住んでいる場所。浄土に対する穢土というのは、私達の間では二人の者が出会うにしても、それは決して一つの場所に出会うのでなく、それぞれ別の場所に立っているんだということを云ったものなんですよ。そういう出会いしか我々のもてないことが、土を穢すということだから。

然し土というものは、実はこの大地でしょう。大地は、あらゆる異ったもの一あらゆる二つの対立関係しかもたぬ異なるものを、しかし等しい心でもって生かしてゆく。大地の「なおし大地の如し、異心無き故に」である。大地は一切の異なるものを迎えるのに、異った心があるのでないというのです。同じ心で迎えるのですね。菩薩の心は、あらゆる互いに異った差別の相をもって生きるものを、同じ一つの心で迎えるので、その菩薩の心を大地というのです。そういう菩薩の大地の心を、我々もまた自己自身の心として生きていることがあるのでなければならぬ、そのことだけが浄土の行になるのです。

又、土というのは人間関係を表わします。土は大地であり、生活環境であって、そこで初めて我々の人間関係が成り立ち、生活が成り立ちます。人間関係とは、自己の他人に対してもつ関係です、これがあって初めて初めて我々の生活が成り立ち、維持されることになるのだから、我々の

もつ自他関係がとりも直さず、我々の生活を支える土という意味をもつものになる。ですから、自分と自分のかたわらにある人との関係こそが土であって、その土が浄められるということにならねばなりません。

関係としての土が浄められるという意味は、異ったところに立つのではない一つまり異心の上に立つのでなくて、同一の心の上に立たなければならぬということ、そこで我々は我々でないものと初めて一つに結ばれるのです。

親鸞聖人は、そういう同一の心というものを師法然上人と出会うことによって、法然の仰せを出会いの場所として初めてそこで頂かれたのでしよう。だから自分の信心は、師法然の信心と少しも異ならぬのだと聖人は云われた。法然上人はこれを受けて、それが異ならぬのは、如来より賜わる信心だからだと応じられた。

その如来より賜わる同一の信心とは、我々がそれぞれ自己を善しとして自己を主張しようとする我々の心よりもつと深く、我々の心そのものを内に深く超えたものとして、誰にも等しく与えられ、誰にも潜（ひそ）んでいるはずです。

ところがその同一の心というものを覚まさない限りは、やはり自分を善しとする立場しかないし、それに立つほかないわけだから、誰とどういふ関係をもつにしても、

結局常に立つところが異ってくることになる。つまり異心

一各自それぞれ異った心を自分の立場として立つわけだ。だからいくらお互いの中で、愛しますとか、敬（うやま）いますとか云ったところで、全く愛が成就しない、その敬いが成就しない、つまり一つになれないし、俱会一処（くえいつしよ）ということが実現せぬ。

しかし親鸞聖人の云われる同一の信心とは、自分と他人の関係を、つまり土というものを浄めて、自と他との間に本當の血の通い合う関係を成り立たせるような信心なので

す。  
聖人が法然上人の仰せによって同一の信心を頂かれたということは、実は、どんなものとも一つになつて出会うてゆける如来の心を頂かれたということを意味します。そしてそういう如来の心でもつて、どんなものとの関り合いもそれを喜んで迎えるということ、どんな自他の関係をも受けとめ、耐えていくということ、そのことだけが浄土の行になるのです。そういう土というものを浄（きよ）める行、自他関係を浄める行の上にこそ、浄める心そのものをもつて荘嚴される世界が成り立つ。そしてそれが浄土、いわゆる功徳莊嚴の浄土です。法蔵菩薩がそういう行をなさったと云って、法蔵菩薩だけにまかせていたんでは、全く無責任なはなしでしょう。それでは我々自身の問題が片つき

ません。

我々は何よりもまず、如来の本願を信受して、法蔵菩薩の精神が、一魂が、我々にも生まれてこなければならぬ。

そして我々自身が浄土の行にいそまねばならぬ。それはむろん、學問沙汰の世界、知識がものをいうような世界での出来事ではない。不可思議の世界の出来事として、しかもこの我々の日常生活をいささかも離れぬ世界での出来事として、具体化されるのでなければならぬ。不可思議というとか何か日常生活からかけ離れたことのように思われるかも知れんけれども、実はそういうものではないのです。決してそういうものではない。

不可思議というのは、むしろ日常生活に深く深く密着したものである。そうでなければ「不可思議」として「思議することあるべからず」として、我々の日常生活に関わつてくるということはないはずだ。そうだろう。思議する生活は私達の日常生活でしょう。私達の日常生活に密着していればこそ、そういう生活を超えながら、しかもそれを否定するものとして、それに関つてくることが出来る。不可思議というものは、何も遠い世界ではない。我々が近いと感ずるよりもなおもっと近い世界、つまり内面の世界です。我々が知るところの世界とは、皆外でしょう。皆遠いんです。我々の内面的な魂に直結した世界が不可思議の世界。仏に成

る道、浄土に生れる道は外にある道ではない。それは内道といわれる道、内面への道なんです。浄土といっても、それを外に思い描いたんでは始まらない。

「俱会一処」の世界は、いわば我々の魂の夢見ている世界です。我々の知らない、しかも我々の内にある、その魂の夢見る世界に、われわれが目覚めるということ、我々が自覚的に入ってゆくということ、それがわれわれの課題なんです。誰もそういう世界を憧れているんです。誰の魂もそういう世界を夢見ている。それなのに、その夢を抹殺してかかるのが、我々の日常意識なのだ。それがたまたま何か生活の破綻といったものにぶつかると、そこで初めて自分にもそういう願いがあったんだ、そういう憧れがあったんだと気づく。人間の相剋の現実がぶつかると。それによって人間は、自分の魂の願う世界が決して相剋の世界でないのだということに思いあたる。むしろ相剋のない世界をもつことによって、人間の魂は初めて鎮まるのだということとをさとする。魂の故郷とか、存在の家郷とかいうことが浄土についていわれるのは、仏の浄土においてのみ、魂の夢みるそうした夢が実現され、魂が初めて魂自身に安らえるということがそこにあるからではないかな。

私は今、魂の故郷とか、存在の家郷とかと云ったが、私が初めてそういうことを思ったのは、丁度あなた方の年頃

となってくる世界、それが存在の家郷とか、魂の故郷とかいう言葉で初めて云い現わされるのではないだろうか。

その世界は、生と死とが、われわれの生きること、死ぬることが矛盾せる故、われわれが永遠と感じとることのできぬ世界だなあ。我々の日常的な意識では、生と死とは必ず矛盾する。何故かと云えば、我々は自分の生きることを善しとするでしょう、その心が同時に自分の死ぬことを悪しとする心なんだなあ。だから矛盾せざるを得ないんだね。だからまた、生死の矛盾しない世界は、生きることに善いならば、全くそれと同様に死ぬることも善しとして、死ぬることそのことを、生きることと平等に受け取る心というものがなくてはならぬことになる。ただそういう心のみが、つまり生と死とをお互いに相容れないもの、矛盾するものとしてでなくて、むしろそれを平等なものとして迎え容れる心のみが、生と死の矛盾せぬ永遠というものを感得できるというわけだ。

永遠、永遠というけれども、永遠というものが、別にどこかにあるんでない。そんなものは言葉としてあるだけだ。もし我々の生の感覚として永遠というものがあるならばそれはただ自己の死を、自己の生と同じく迎え容れる、その我々自身の平等心のみあるので、平等心のみが初めてそれを感得できるのだ。我々の死が却つて我々の生を完結

の時です。つまり私が人生の無意味さとか、空しさとかいうことを思いつづけ、自分の存在そのものがまるで根なし草でもあるかのように、その日その日の刺激しだいで、右に動くかと思えば左にも流れるといった、そんな感じで東京で生活していた時のことです。だからそういう生活に対する私の関わり方は、先にも言ったような「時を殺す」というものであった。

ところがそういう生活に結びついて、いまの魂の故郷とか、存在の家郷とかという言葉が、私の心のうちから初めて出てきているんだなあ、永遠の故郷が思慕されるんだけど、言葉だけなんで、実際は何もわかっていなかった。しかしね、これは言葉だけなんだけれども、こういう言葉というものが、確かにこれ、自分が自分の言葉として自分自身のために記録し、それにそこにはそこはかとなない感情さえ、憧憬さえもがともなった言葉であったという事実、この事実は一体何を語るのか。一何にしても一方では人生の空しさを感じると同時に、その反面また反射的に、魂の故郷というようなものを感じるという、そういう芸当ができるのは、春青時代の特権だと思ふ。これは若い時でないと感じられぬことで、動脈が硬化し始めたらもう出来ないことだ。若い時に、人生の不安を感じるその意識、それが私は大事と思ふ。その不安の意識を通して我々にも初めて問題

するといつたような、そういう意味をもつものこそが永遠でしょう。

だから仏教は出離生死の道だとかういわれる。出離生死の道だとは、つまり人間の心においては、生と死とが矛盾しているということがある。我と我が心をもつてしかける生と死との矛盾のわなに捕えられて、我々は苦しみ悩んでいるのです。生きながらすでに死を恐れ、死の前を遁走する格好でしか生きられぬのが我々である。死の影に怯（おび）えて生きるほかに生きようのないのが我々である。そういう矛盾を克服するもの、それが死をも生と同様喜んで迎え容れる平等心なんです。

この平等心は、むしろ我々の自殺を肯定する心理とはまるで違う。自殺の心理は、生を否定して死を肯定する病める心理―盲目的な人間の自我肯定の心理、もとよりそういうものではないのです。如来の平等心というものは、生くもよし、死ぬるもよしとおおらかにいうことのできる心なんだ。―生死する生命そのものの絶対的肯定の心である。ただそういう心のみが、実は永遠を感得することが出来るのだらう。そういう心に応じる世界、それが永遠の世界、生死の矛盾せぬ世界。生が、死そのものによって却つて完うせられる世界なんだ。その永遠の世界はただ生と死との矛盾せぬ如来の心をもつて荘嚴されるという世界。



だから、そのような生死の矛盾せぬ如来の心を心として我々がここにあって生きること、それが即ち我々の浄土の行になるといふわけです。生死の矛盾せぬ心で、しかも我々の現実の人生をありのままに受けとつてゆく心が即ち浄土の行なんです。だから心を離れて浄土があるのではない。それは修因感果（しゆういんかんか）というもの。因を修めて果を感じる、その果の世界が浄土でしょう、因は我々の心にある。

つまり我々を支えるところの心にある。我々の生活全体を支える如来の心、その如来の心を我々はつきりさせなくはいかん。その如来の心を「念仏の心」に受けとめてはつきりさせるのでなければならぬ。

念仏のころとは、我々の意識の表面にあるものではない。こちらに日常生活のころがあり、あちらに念仏のころがあるというものでない。生活の全体を超え、全体を包んで、それをその底から支えるものとして念仏のころがあるわけです。そういう念仏のころが我々の自覚となつてあらわれるのが、つまり「念仏もうさんとおもいたつ心のおこる時」であるといわれる。「念仏もうさんとおもいたつ心」は、私の生活全体を超えながら、それをその底から支える心でしょう。だからそれは、私という個を通じながら、世界の歴史全体をつつみ、歴史の上に超え出る心

### 念 仏 詩 抄

情 慢

〃そうやつて  
聞き歩くのもよいが  
鯛にも骨がある  
身だけいたただかれよ〃  
能信院師の  
おんざとし

〃鯛ならよいが  
イワシだつたら  
どうしましう〃  
これを橋慢と  
いうのでしう

〃邪見橋慢悪衆生  
信樂受持甚以離〃

であり、歴史を超えながら歴史を包んでいる心なのだ。

### 芭蕉翁の言葉

松の事は松に習え。竹の事は竹に習えと師の訶のありしも、私意をはなれよということなり。この習えという所を己がままにとりて終に習わざるなり。

習えというは、物に入りてその微のあらわれて、情感するや句となるころなり。たとえは物あらわに言出でてもその物より自然に出づる情にあらざれば、物、我二つになりて、その情まことにいたらず、私意のなす作意なり。

此の道に古人なし

かりにも古人の誕（よだれ）をなむることながれ。四時の押し移るとて物あらたまるるに皆かくのごとし。

俳諧は三尺の童子にさせよ、初心の句こそたのもしけれ

座右之銘

人の短をいうことなかれ  
己が長をとくことなかれ

物いえば唇寒し秋の風 (芭蕉庵小庫)

### 木 村 無 相

### 念 仏 詩 抄

敬信老人七十四歳  
〃はずかしや  
筆にあらわす  
領解書（ぶみ）  
カリ・ニセ・ウン  
のころのみにて〃

### 念 仏 詩 抄

カリ・ニセ・ウン  
念 仏 衆 生  
ナムアマミダブツと  
いうことは  
如来法蔵さまの  
お呼びかけ

念仏衆生と  
いうことは  
呼びかけられた  
もののこと

念仏衆生撰取不捨  
念仏衆生撰取不捨  
ナンマンダブツ  
ナンマンダブツ

どこやらで  
われ呼ぶ声の  
秋のくれ  
たのませたまいて

親鸞聖人さま  
自然法爾章に  
〃弥陀仏の  
おんちかいの  
もとより行者の  
はからいにあらずして  
ナムアマミダブツと  
たのませたまいて〃

たのませたまいて  
たのませたまいて

ああ  
そのおんはからいの  
おねんぶつ

ああ  
そのおんはからいの  
おねんぶつ――

わが罪の

わが罪の  
かずかずおもう  
今朝の秋

ありたけ

〃ただ念仏して  
弥陀にたすけられ  
まいらすべし〃

ただ念仏しての

仰せの中に

弥陀のおたすけの  
ありたけがある

ただ念仏して  
ただ念仏して

によらいは

わたしが  
わたしが  
わたしで

あるように  
によらいは  
わたしを  
念じます

わたしが  
わたしで

あるように  
によらいは  
み名を  
くだされし

むせやけ

明信寺師仰せに

〃人目（ひとめ）

よく信するように見せて  
内心自力にとどまるなら  
蔵の中の

蒸せ焼け（むせやけ）じや〃

聞かねばならぬ

聞かねばならぬ

聞いて聞いて

聞きつくり

聞きどころも

用のないまでに

丸もうけ

念仏もうせば

丸もうけ

この世の日ぐらし

丸もうけ

生老病死

丸もうけ

ナンマンダブツ

ナンマンダブツ

（昭和四七・九・一〇）

# 生きること・死ぬこと

花田 正夫

## 二 生き死にを併せもつ

清沢満之先生は三河に於かれて明治時代に大きな影響をもたれた方ですが、明治三十六年に亡くなられました。肺疾で血を吐かれるようになった明治三十五年に、「われらは生き死にを併せもつている。生き死にによって左右されてはいけない。生き死にを超えた世界に生きなければならぬ」ということを云っておられます。

生き死にを併せもつという事は誰しもよく知っていることでありますけれども、わたしどもは生は肯定するが、死を肯定していません。生きることを考えて、死を忘れ、また拒否しております。これにつけても最近フランスの女流作家でサルトルの内妻でもあるポポワールの「老い」という著書がしきりに読まれておりますが、この本に「アメリカ、フランスでは死ぬるか老人とかいうことは人生の恥部であって、いうてならないことであり、これを云う人は不謹慎きわまると、みんなから排撃をうける。だが釈

尊は、生・老・病・死をわがこととみて、超えて行く道を見出された。だから自分はどんなに嫌われてもこれを書く」といって、老いという問題を紹介しております。しかしこれはフランスやアメリカばかりではありません。私自身が、死を拒否し、老いをみとめたくない。七十近くなった私が老人といわれるのが嫌な気持ちがいたします。こゝろ私が生き死にを併せもつというようなことを、自分にくけることは至難であります。

最初私に死が問題になりましたのは小学生の時でした。妹があやまって池に落ちて死にましたが、その死体に触れたときに氷のように冷たいのに驚き、全身がゾゾツといったしました。それが死を知った始まりであります。それから旧制中学の三年の春、兄が十九で死に、その秋に姉が二十八で二人の子供を残して亡くなりました。当時、誰にたずねても死の問題に答えてくれません。高校の入試の準備をしておりまして、死を考えると、もうすべてが崩れるの

です。しかし誰も答えてくれません。

その後高等学校に入学出来まして、まず死を考えようと山に入り、飢えと寒さが迫ったら本音を吐くだらうと、冬休みの寒い日に山にこもりました。ところが三日目に、空腹が迫り、風邪にかかり、高熱を出してスゴスゴと帰ってきました。やりましたことは子供だましのようなことではありますが、それを通じて、フト思いましたのは、唐紙の向こうのことさえわからない私が、どうして死後を知ることが出来るか、わからないのが本当だとなつたかされたのであります。すると、孔子も「生の從來するところを知らず、いづくんぞ死を知らんや」といっておられる、本当にその通りだなど、一応けりがついたのです。

ところが、六高から岡山医大に入りました年の春に父が死にました。これはまことに私にとって大きな悲しみでありました。その後医大に三年おっただけであります。その三年の間に、親しい同学の友が二人も死にました。その友が最後に「僕は医師になって、病気を治し、人々のいのちをまもろうと願っていたが、自分が死ぬとは知らなかった」と云いましたが、この最後の言葉が私の胸に強く焼きつきました。そして、自分もその通りだと痛感しましたが矢張り人ごとで、自分のことにはなりません。

ところが私の上に病がのしかかったのは、名古屋にまい

りまして、三十五歳の時でした。肺浸潤で二年寝たのです。その時、鉄筋コンクリートのように思っていた体もひびが入るのだなあということを知り、真田増丸師が「今日も人の死ぬ日にて候」とよく言われたこともあらためて思い浮かべました。しかし幸に段々恢復し、大戦のはじまる頃になつてどうにか病を忘れるまでになりました。

それから私の四十二歳の時、敗戦となり、動乱の最中に、仏心を共々によるべとし、新しい日本の道を進みましよう。と、歎異抄と聖徳太子精神を灯火として走り廻っていましたとき、過労から狭心症の発作で倒れ、名大に入院し、心筋障害と云われ、ひびのいった茶碗も大切にすれば長くもつものだ、昔から一病息災というから、一つ病氣をもつたものはよく身体に注意するからかえって長生き出来るとはげまされて、蓬戸不出に近い生活を続けて長持ちさすことにかかりきつておりました。

ところが六十五歳になって突然濃い血尿がでて、膀胱腫瘍とのことで名市大病院に入りました。この時初めて、自分の死が目の前にふさがつてきたのであります。ツルゲーネフの「老婆」という詩に「老婆が後からしつこくついてくる。自分が走ると相手も走る、じつととまると相手ともまる、道を曲つても何処までもついてくる。逃げようとしても逃げられない。フト前方を見ると自分の墓場がある。

しまった！死だ！」という意味のものがありますが、私にも、このツルゲーネフの墓場があらわれてきたのです。

さてそうなってみると、荒れ狂う海原の、まつくら闇の中で、ひとりぼつち、櫓も權も失って、波間にただようている、大きな波が来ればひと呑みにされ、力になるものは何にもないという始末でした。遠い浜辺では燈火をふりかざしながら、肉親をはじめ、友人縁者の人達がオーイ、オーイと呼びかけてくれます、それはありがたいことでもありますけれど、私を内から支えるものではありません。

こういう私に、たつた一つ力になって下さったのが、かねてから続いております『歎異抄』の九章であります。その中に、どんなに名残り惜しく思っても、愛執、愛着の人生と別れていかなばならない「名残り惜しく思えども娑婆の縁つきで力なくしておわるとき、彼の土にまいるべきなり、急ぎまいりたき心なき者をことに憐れみたまうなり」との親鸞聖人のお声が、しみじみと胸にしみこんで、死を前に何一つよるべのない私に、ご一緒して下さいる仏が、ましました、いま一人のわたくしとなって下さる方があつたとしられ、しきりにお念仏がかび出しました。ここに苦しい悲しい死もまた受けとって迎れる道のあることに気づきました。

かえりみますと、わかりきつた死を拒否し続けておりま

のような『歎異抄』の九章を通して、いま一人のわたくしがあらわれて下さることをあたらしく知らされました。

篤信の人が「ひとりでも行かねばならぬ旅なるを弥陀にひかれて行くぞ嬉しき」と詠じていられますが、闇い山路も親と一緒にあれば、超えさせて頂けるのであります。このことを知らされひじょうに嬉しく有難く仏恩を仰ぎました。

### 三 生き死にを貫ぬくのち

数年前でした。私は岡山の田舎の中学を出しましたが、その卒業五十周年の記念の会がありました。私は残念ながら病気で欠席しましたが、その時の記念写真を送ってくれました。それをじつと眼をこらして見ましたが、五年も一緒に学んだ友達を一人も想い出せないのです。そこで友達の名を覚えて貰いましたが、それを聞いても、五十年前の友の姿は浮かびますが、現実と結びつかないのです。遠ざかれば疎んじ、離れば忘れろという人生の鉄則に完全に支配されてしまつてゐるのに驚き、浦島太郎の物語り通り啞然としました。

これと反対に、私の七十年の歳月を振りかえり、変ることのない友情が続いている友達が心に浮かぶのであります。

それは宗教上の友たちです。あるいは岡山時代、京都時代、大連時代、また名古屋に移り住んでもう四十年近くな

すのも、死の闇黒が怖かった、一切が崩れることが悲しかったからであります。こうした私をことに悲憫して飽くまでもご一緒下さるいま一人のわたしがあつて初めて、どんなに苦しくても、それに随順して超える道がひらけたのであります。

いまひとりのわたし、というのはヘレンケラー女史がつかつた言葉です。盲で聾で啞のヘレンケラーが、三重苦の中で「こうしたわたしには外からの教師は無用であります。なくつてはならぬのは今一人のわたしです」と云つておりました。外からの教師とは、ああしなさい、こうしなさいと教えてくれますが、そのようになれぬときは捨てる人で、今一人のわたしとは、目が見えなければ、よろしい私が目になりましょう、耳が聞こえなければ、よろしい私が一生耳になりましょう、ものが云えなければ、私が生涯あなたの口になりましょう、いつも私になりきつてくれる人のことです。それを女史の家庭教師のアンサリヴァンに對して満腔の感謝の言葉としておりました。

私は親鸞聖人と仏の御本願のまことが、今一人のわたしとなつて支えて下さるのであります。仏と私どもとは二にして一つ、一つにして二で、それはとろけあつてあらわれて下さるのであります。ここに最初に申しました清沢先生の「生き死にを併せもつ」というところをわたくしはいま

りますが、そういう月日が流れ去つても、変ることがなく地下水のように交流する友達があります。しかもそれはいつししょうけんめい努力したのではないのです。自然にそうなつてゐるのです。

京都時代でしたが、京大のドイツ語を出た非常に頭の鋭い友達が、或日訪ねて来て「お互に環境もちがい、性格も違ふのだから、これからも意見の衝突もするだろう、あるいは憎み合う争いもあるだろうが、そうしたことによつて切れないものがあるね」と云つたことがいまにして非常に意味ふかくころをうつのであります。

又岡山の高等学校のころ、内村鑑三氏の随想に「自分は色々の人の世話をした。然しその中で成功すると、昔の困窮していた頃を思い出したくないのか、段々遠ざかつていった。又世話をしても一向にうだつのあがらぬ人は敷衍が高くなつたといつて近づかない。結局はよくなつても悪くなつても別れていく、離れていく。ただその中で、聖書を共に読み、道を共に求めた友だちだけが交誼を続けている」というようなことを書いてありました。私自身も今頃になつて、なるほどとうなづくのであります。

これについて、話は変わりますが、思い出しますのが、七百年前の親鸞聖人と源頼朝公のことです。一人は平家を滅ぼし、鎌倉で幕府をひらき、征夷大將軍として威勢

地を払った頼朝公。一人は、九十年の長寿を完うせられ、  
したけれども、ごく僅かの人に知られて、ほとんど名もな  
く、寺も持たれず終っていかれた聖人であります。当時、  
頼朝公の威勢にくらべると、乞食僧同様のとるに足らない  
聖人でありませんが、時流れて七百年、幾人の人が鎌倉の頼  
朝公の墓前にひざまずき御礼を申しあげようか、それ  
にひきかえ聖人の東山の廟所に、何千何万の人々がこころ  
から随喜して大恩を謝しておりますことか、この事実に驚  
くのであります。

親は生存中より死後の方が子の胸に鮮やかに浮びます。  
私も親を失って、色々な経験が縁となって、あんなときも  
あった、こんなこともあったと知らされはじめました。夕  
陽が西に沈むとき、月光が空に輝きわたるように、遠ざか  
れば遠ざかる程、離れば離れるほど、強くあざやかに口  
の世の親が慕われてくるものですが、聖人は久遠の世の親  
のおもむきをもって、徳光はいよいよ私共を光被して下さ  
るのであります。

それでは、なぜ宗教上の友達や聖人がそのように時の流  
れを超え、死を超えて光を放つのであろうかという、絶  
對真実の道に立つ、その真実の道なるが故に、時代によつ  
て消されず場所によつてさまたげられない、そういう道に  
支えられ、その道そのものが永遠に働くからであります。

た会えるから……」といわれ、なお悲歎に沈まれる奥様  
に向かつて「しつかり念仏するんだ、しつかり念仏するん  
だ。どこまでも念仏でつながっていくんだよ、いいか、南  
無阿弥陀仏」と諄々と奥様に救いの綱を渡されました。  
このことはまことに私の心にもしみとおるのであります。  
また京都時代に、治田さんが私共の寮のお世話をして下  
さいましたが、その方が胃ガンで死を前にして、私共の顔  
をひとりひとりじつと見つめながら「夢です、みんな消え  
てゆきます」といわれ、その人の顔には、濁りのない赤児  
のような微笑が浮かんでおりました。そして「みんな来る  
んですよ、みんなここへ来るんですよ」といって、これが  
お別れの言葉となりました。この世が確かなものと見えて  
おる時には、浄土が夢のように思えますが、この世が夢幻  
とみえる時、浄土は厳然としてここに、その壮嚴さをあら  
わす、その尊さがあらわれてくるのであります。

また旧臘十二月であります、私の長年したしくしてい  
た信友が、痛でなくなりました。枕元にお見舞いしますと  
手をさしのべられるので、握手して別れを惜しみ、やがて  
手を離し「この世の手はどんなにしつかりと握っていても  
また離さねばなりません、仏のおまことにつながる念仏  
による手は、永遠の彼方まで消えるということはなく、や  
がて浄土で俱会一処させて頂けますね」と語って、合掌

一三〇〇年前に出られた聖徳太子が「いずれの世、いず  
れの人かこの法(みのり)を尊ばざらん」、時代が移ろう  
が、民族が変わろうが、老少善悪の人をへだてなく、万人  
が、何時でもうなづける道だと、太子は云っておられます  
が、これを見出された太子、ことに内憂外患もごも迫る  
中において、不滅の光、普通の道をそこに得られた太子は  
どんなにか慶喜されたことであろうか。

さてこういうことを実際にうなづけるようになりました  
のは『歎異抄』を通してであります。聖人の仰せが、私に  
七百年の歴史を超えて、現にこの私のことだと、いつもあ  
たらしく生き生きとしてひびいてくるのであります。たと  
えば「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親  
鸞一人がためなりけり」という常の仰せがあります、こ  
のことは同時に、わたくし一人の弥陀の本願と知らされ、  
聖人のお言葉がそのまま私の言葉となり、時の流れを超え  
てしまうのであります。

すでに申しました池山先生が六十七歳で亡くなられたの  
であります、死を前にされて奥様の友子夫人が別れを悲  
しまれたとき「生きてやりたくても命がないじやしようが  
ない……南無阿弥陀仏……可哀そうにととうお前も一人に  
なるんだな」と云われて、じつと奥様を見つめ「ああ可哀  
相に、然しこれで別れきりじやないんだよ、そのうちにま

し、名残りを惜しみ乍らお別れいたしました。

### 安心百話

住田智見

一蓮院師が名古屋別院での最後の御座に

「ながなが仏法の話をしたが、何にも覚えてかえるでな  
いぞ」南無阿弥陀仏一つでたすかるとのことだけは、  
同行にも、子孫の末までもわすれぬように申し伝えてお  
いてくれ」  
とくれぐれも述べられた。

又云く。

「お前がた、何とおもうて居るか、南無阿弥陀仏」と  
申すは、お母さん／＼ということである」

横川の源信僧都は、母上のお引き立てから真実の仏法を  
喜ばれるようになった。そのはじめは名聞の心から経典を  
拝見になったと仰せられ、横川に隠棲後は常に「名聞」の  
二字を掛軸として礼拝せられたと伝えられる。

伯耆の九右衛門は、平常何事にも「名聞様のおかげで」  
と申してつとめたという。真実に心底から「名聞様のおか  
げで」と喜ばれる人なら、名聞が転じて居るのである。注  
意せねばならぬのは私共の心である。

# あとがき

本年は異状な天候で酷暑と渇水の中を皆様の御無事を祈念いたします。それでも夕方にはコオロギがしきりに初秋を吾げて涼味にホッと一息ついております。

先日永年ライオン等を立派に飼育している人の話が放送されましたが、ライオンが狭い場所に閉じられ、食物に不自由せず、運動不足な生活を続けていると段々と家畜化されて本性を失い、子を産みおとしても育てようとしなくなるということでした。これを聞きながら現在日本の子供も、物に恵まれ、過保護をうけ、自然界で生き／＼と活動する子供の本性が失われ、人間の家畜化現象が出ている。ことに事情はともあれ最近の子捨てなども思い併せられ深く反省させられました。

其外に公害の問題、人間の疎外と断絶と孤立、自我のみが主張され真実に対する敬虔さが失なわれ、日々の報道も暗い悲しいことばかりでありますが、末世であるという世紀末の声もきかれます。しかしこのように「客観的に現代を末世と見ることは親鸞聖人の末法の自覚でない」と三木清氏はその遺稿（昭和十九年）に述べています。

「末法の自覚は自己の罪の自覚において主體的に超越的なものに触れることを意味している。この時には何人も自己を底

下の凡愚として自覚せざるを得ないであろう。彌陀の本願はかくの如き我々の救済を約束している。如来の救済の対象はまさにかくの如き悪人である。悪人正機の説の根柢は末法思想である」とも誌しております。惜しいことには氏は昭和二十一年に四十八歳で豊多摩刑務所で獄死しました。氏の言葉から悪の原因を他に置き、時代の悪であると弁解して自己の罪を時代の責任に転嫁することでないときびしく教えられました。

## 菅瀬秀英の生涯と語録

西本清人

編定価、六五〇円。送料一一〇円。

発行所、百華苑。京都市下京区堀川

通花屋町。

振替、京都 二五七八八番。

## 京都一道会御案内

時、十月二十八日（日曜）午後一時

所、京都市右京区山田開町、浄住寺

市バス、京都駅より蒼寺下車

阪急、桂乗換、上桂下車。

## 御案内

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半。

一道会例会。南区駈上町二ノ八八。市電、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、左入ル。

○毎月二十四日、午前午後、昭和区小核町、教西寺、法話会。

市電、御器所通り下車。市バス、北山下車。

定価 半年 四〇〇円（送共）  
一年 八〇〇円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ八八  
編集・発行人 花田 正夫  
電話八二一〇七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷  
印刷人 吉野穂志郎

名古屋市南区駈上町二ノ八八  
発行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番  
郵便番号 四五七